

東京大学ヒューマニティーズセンター オープンセミナー特別回

王の手紙、皇帝の文書：外交の世界史に向けた韓国、タイ、日本の鼎話の試み

- ▶ 2019年11月29日（金）13:00 - 19:00
- ▶ 東京大学伊藤国際学術研究センター 3階 中会議室

入場無料 | 事前登録不要

報告者：パーワン・ルアンシン（チュラーロンコーン大学）、ティーラワット・ナ・ポンペット（チュラーロンコーン大学）、鄭東勲（ソウル教育大学）、丘凡眞（ソウル大学）
司会：松方冬子（東京大学史料編纂所）

言語：英語・韓国語・日本語

共催：ヒューマニティーズセンター、東京大学史料編纂所



外務省文書ウィレム2世の将軍充ての手紙への返書（1845年）
老中連署書状
（オランダ国立公文書館所蔵：NL-HaNA, 2.05.02/3147a）

【概要】

前近代の外交の世界史を語るうえで、欠かせないのが国書である。しかし、国書が19世紀ヨーロッパ型の外交史の外にあるがゆえに、その多様な具体像は必ずしも十分明らかにされていない。本セミナーでは、タイと韓国から研究者を招き、報告を仰ぐとともに、共通の議論の土台を作ることを目指す。

パーワン・ルアンシン氏（Bhawan Ruangsilp）は、アユタヤ王統記及びオランダ東インド会社文書に記録された国書の分析を通じて、近世のタイとビルマが如何に対話の道を拓き均衡を維持しようとしたかを探る。ティーラワット・ナ・ポンペット氏（Bhawan Ruangsilp）は、オランダ東インド会社がスア王の治世初頭に対シャム条約の更新と平和同盟の延長を企図した際、外務・財務大臣（プラ克蘭）が、外交上のプロトコルや先例、王の命令などについて会社総督に送った手紙を分析する。鄭東勲氏（JUNG Donghun）は、明の皇帝から宦官を通じて朝鮮に伝えられた非公式のメッセージに、公式の文書には出てこない皇帝の個人的な興味が反映されていたことを明らかにする。丘凡眞氏（KOO Bumjin）は、1644年の清の入関以前における朝鮮国王の冊封文書が合壁であったか否かを問い、同時代の記録から実像に迫る。

問合先：東京大学ヒューマニティーズセンター事務局
Tel: 03-5841-2654
E-mail: humanitiescenter.utokyo@gmail.com
URL: <http://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/>



ヒューマニティーズセンター
Humanities Center

HISTORIOGRAPHICAL INSTITUTE THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京大学史料編纂所